Hirosaki MOCA Letter

vol.01

TAKE FREE

弘前れんが倉庫通信

弘前れんが倉庫美術館をもっと楽しむフリーペーパー

特集：美術館をより楽しむ建物の魅力！

夕暮れの淡い光を吸い込んだ屋根は仄青く、
そこにある人の営みを静かに照らしだす。
そのうちひとり、またひとりとその場所をあとにし、
やがて誰もいなくなったとき、光と闇が溶け合うように三角屋根の輪郭線が浮かび上がる。
その日訪れた人々のまだ微かに残る痕跡を館内に閉じ込めながら。
それは、翌朝の光とともに消えてしまうものなのかもしれない。
けれど、その光に照らされる屋根の輝きは、人々の思いの数だけ色を変えて、
きっと誰かのもとに届いているだろう。

FEATURE 特集

美術館をより楽しむ建物の魅力！

醸造所から米倉庫、そして美術館に。“弘前市民のこころ”を未来につなぐ現代美術館

“過去と今”が融合した弘前の新しい顔の誕生――。

2020年、弘前市吉野町に「弘前れんが倉庫美術館」がオープンしました。今から100年以上前、明治・大正時代に建てられた古いレンガの建物が、現代アートを展示する美術館に生まれ変わりました。

明治時代、りんご園だった場所にできたレンガ造の建築物は、当時としては珍しいものでした。日本酒の醸造所から戦後はシードル工場となり、その後、米倉庫として長く使われていましたが、昭和の終わりころ、弘前市民から「このままではもったいない！」という声があがるようになりました。

そして2002年、この場所をアート空間として印象づける熱狂的なムーブメントが起こります。弘前市出身の美術家・奈良美智さんによる展覧会の開催です。3度に渡って開催され、全国から多くの来場者を集めました。

「記憶の継承」をコンセプトに田根剛さんが設計

弘前れんが倉庫美術館の設計者は、気鋭の建築家・田根剛さんです。田根さんは軍用滑走路を再利用したエストニア国立博物館の設計で知られています。

美術館の建築コンセプトは「記憶の継承」。「先人が未来の我々のことを想ったように、我々もさらに未来の人々へ向けてその想いを継承していく」と田根さんは語っています。レンガやコールタールの壁をそのまま使用したほか、取り外した天井の木材を再利用するなど、残せるものは可能な限り残す形で改修が行われました。

「福島醸造」の経営者・福島藤助が手掛けた建物の多くは、当時珍しかったレンガ造りでした。藤助は「頑丈な素材を用いることで、たとえ事業に失敗しても市の将来のために遺産として残すことができる」というこだわりを持っていたそうです。そんな藤助の願い通り吉野町煉瓦倉庫は100年後もその姿を残し、「弘前れんが倉庫美術館」として今まさに生まれ変わったのです。

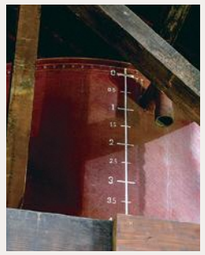
©Naoya Hatakeyama

過去から未来へ受け継がれた弘前れんが倉庫美術館の見どころをチェック！

撮影・柴田 祥

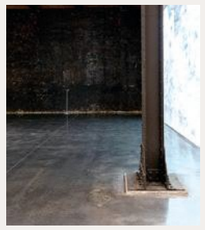
色合いを変えるシードル色の屋根

改修の際に葺き替えられた美術館の屋根は、かつてこの場所で作られていたシードルを想わせる金色で、それはまさに「シードル・ゴールド」。正方形のチタン材を約13,000枚使用した「菱葺（ひしぶき）」の屋根は、日光の当たり具合によって微妙にその色合いを変え、さまざまな表情を見せてくれます。



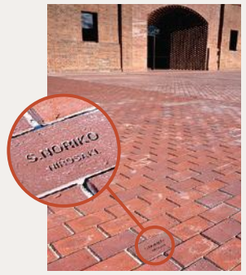
隠しキャラのように潜む貯水タンク

2階ホワイエから天井を見上げると、梁の陰に隠れるように設置されている赤茶色のタンクを見つけることができます。これは階下で瓶を洗うための水を貯めるためのものでした。こんな大きなタンクをどうやって天井裏に設置したのかは、スタッフの間でも謎だそうです。



展示室の壁や鉄柱にも昔の名残りが

美術館としては珍しい黒い壁面は、改修前のコールタールが塗られた壁をそのまま使用しており、当時のへこみや擦り傷が見られます。めずらしいリベット（鋲）溶接が打ち込まれた鉄の柱も建設当時を思い起こさせてくれます。



名前が刻まれた「ミュージアム・ロード」

美術館とカフェ・ショップ棟の間に敷かれたレンガの道には、名前の刻まれたレンガがいくつも使用されています。美術館のプレ会員やふるさと納税で寄附をした方々です。弘前市内はもちろん、県外や海外在住の方の名前もあります。夜になるとライトアップされ、幻想的な雰囲気に包まれます。

©Yoshitomo Nara

《A to Z Memorial Dog》がお出迎え

美術館に入ると真っ白な犬の彫刻作品がお出迎え。美術館の顔というべき奈良美智さんの《A to Z Memorial Dog》（2007）です。下に敷かれた楕円形の台座は、屋根裏に使われていた古材を再利用しており、倉庫当時に断熱材として利用していたもみ殻の跡を見ることができます。

上には行けない階段❷

オフィスの中に残されている木製の階段。通常見ることはできません。

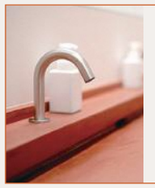
窓から見える弘前らしい光景

美術館の窓の位置は改修前から変わっていません。美術館正面に広がる緑地を見渡せるのはもちろんのこと、土淵川を挟んだ先にある最勝院にある五重塔、遠方には津軽のシンボルである岩木山の姿を見ることができます。

どこかなつかしい白い壁のオフィス

2階にある白い壁の向こう側は美術館オフィス。工場時代からある木造の壁や、はめ込まれたガラス窓に味わいがあります。

PICK UP!



トイレにも注目!!

本来なら秘されるべきトイレも注目ポイント。レンガ色の洗面台や床、鉄製のトイレットペーパーホルダー、レンガ壁をそのまま見せるなど、内装や間接照明に田根さんのこだわりが感じられます。

上には行けない階段❶

美術館には上の階に行けない階段があります。1階ホワイエ脇にある鉄製の階段は、現在使用することはできませんが「記憶の継承」という美術館のコンセプトのもと、そのままの姿を残しています。

姿を現したレンガの壁

エントランスの内壁は年季を感じさせるレンガ造り。元々あった壁の漆喰を剥がして煉瓦を露出させました。崩れてしまった壁の補強や「弘前積み」には新しいレンガを使用していますが、古いレンガと調和するよう、レンガの焼きムラも調整し、仕上げています。

田根剛考案！「弘前積みレンガ工法」

レンガが互い違いに積まれた美術館の入口は、奥に進むにつれて、すぼまっていき、あたかも違う世界へと導くような趣き。これは田根剛さんが考案・命名した「弘前積みレンガ工法」という独特の工法です。

PICK UP! PEOPLE

美術館とまちをつなぐ
わたし・アート・まち

雑誌「BRUTUS」の居住空間学特集

喫茶室baton 店長　漆舘 斉さん

高校2年生の時に通っていた喫茶店のマスターから勧められた「BRUTUS」の居住空間学特集を読んで空間づくりに興味を持ちました。建築関係の学校を志したもののそれは叶わず、神戸で食品関係の仕事に就くことになるわけですが、そこで小さいけれど個性的な専門店をいくつも見て歩いたことが後の喫茶店経営に生かされたのではないかと思っています。

その後、青森県に帰ってきて最初の喫茶店「TEA&CO. COMPANY」を開店することになります。さあ、どこにしようかと、青森市でもなく八戸市でもなく、弘前市を選んだのは、古いものと新しいものが交わる文化の香りのするところであったというのが理由です。

現在、経営している「喫茶室baton」の名前の由来は、劇場の天井付近にある照明や背景幕などを吊すための棒・バトンからきています。観客からは見えない黒子的な存在という意味と重ねて、芸術には欠かせない場所として喫茶店はありたいと思います。

【喫茶室baton】
弘前市民会館のホールとテラスでつながる中2階にある喫茶店。佐野ぬい氏原画による大型ステンドグラスを間近で鑑賞することができる。コンクリート打ち放しの外観が特徴的な建物は、建築家・前川國男の設計によるもの。

STAFF VOICE

美術館のおしごとアレコレ
スタッフに聞きました！

弘前れんが倉庫美術館 Members #01

テクニカルディレクター　澤田 諒

澤田諒さんは埼玉県出身。2019年12月に弘前に移り住み、開館の準備にあたってきました。美術館の“テクニカルディレクター”と言っても、耳になじみのない方が多いかもしれません。それもそのはず、同様の職種は全国でおそらく10人もいないそうです。

「美術館では作品が主役。作品をより良いかたちで見ていただけるようにするのが私の仕事です。」と澤田さん。アーティストや学芸員と連携し、設計図の作成や映像・音響機材の配線の調整など技術面で展覧会を支えています。

弘前れんが倉庫美術館での一例は《A to Z Memorial Dog》。奈良美智さんの要望をもとに検討を重ね、倉庫の屋根裏に使われていた古材を使った台座を制作しました。「作家の真意を的確にくみとることが重要です。」

私たち来館者が展示作品を見て楽しむ館内では、澤田さんの裏方としての努力が見えない光を放っています。

聞き手・佐藤史隆（タウン誌編集者）

Exhibition information 展覧会情報

開館記念 秋冬プログラム
「小沢剛展　オールリターン
―百年たったら帰っておいで　百年たてばその意味わかる」
会期：2020年10月10日（土）～2021年3月21日（日）

Event report イベント報告

ナイトミュージアム

実施日：2020年8月21・22日

開館後初となるメンバーシップ会員向けのナイトミュージアムツアーを実施。両日とも10名を超えるメンバーズが集まり、当館スタッフが建築ガイドと作品ガイドツアーを行いました。普段は立ち入ることができない閉館後の展示室内では、学芸スタッフによる生の解説と共に作品を鑑賞。少人数でじっくり作品と向き合うことができた、またとない贅沢な時間になったのではないでしょうか。

弘前れんが倉庫美術館
［開館時間］9：00～17：00　※但し、金曜日・土曜日に限りスタジオ、ライブラリーのみ21：00まで開館
［休館日］火曜日（祝日の場合は翌日に振替）、年末年始
〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1　［TEL］0172-32-8950　［Mail］info@hirosaki-moca.jp
［駐車場］思いやり駐車場2台　※お車でお越しの際は近隣の有料駐車場をご利用ください

HIROSAKI MUSEUM OF CONTEMPORARY ART

［編集協力］ものの芽舎　［デザイン］デザイン工房エスパス　［表紙写真］畠山直哉　［印刷］凸版メディア株式会社
［編集・発行］弘前れんが倉庫美術館（指定管理者 運営業務担当　エヌ・アンド・エー株式会社）　［発行日］2020年9月30日